

中国四川省大地震 パンダタオルプロジェクト 「第5回現地報告会」



[日時] 11月3日(火) 18:30~20:30
[場所] 名古屋国際センター 第3研修室

[内容]

① 現地報告

吉椿雅道さん (CODE海外災害援助市民センタースタッフ)

中国四川大地震応援団 第三次パンダタオル班

(中国四川大地震支援「パンダタオルプロジェクト」ボランティア)

コーディネーター: 栗田暢之 (特定非営利活動法人レスキューストックヤード代表理事)

② 意見交換

[主催] 特定非営利活動法人レスキューストックヤード

[共催] 特定非営利活動法人日本災害救援ボランティアネットワーク (NVNAD)

[協力] 特定非営利活動法人CODE海外災害援助市民センター

[後援] 名古屋市、財団法人名古屋国際センター

中国四川大震災パンダタオルプロジェクト 第5回現地報告会

〔これまでの経緯と趣旨〕

2008年5月12日に発生した中国四川大地震を受け、RSYでは6月16日、名古屋国際センターにて「現地報告と今後の支援を考える会」を開催しました。当日は100名を越す参加者が集まりました。その後、有志で作業部会を立ち上げ、「被災地を忘れない・思いを馳せる・気持ちを届ける」をキーワードに、日中友好のシンボルであるパンダを象った手拭タオル「パンダタオル」とメッセージカードを作成し、被災地に送る活動を始めました。この企画を「中国四川大地震パンダタオルプロジェクト」とし、10月から現在まで、聾学校や国際交流に関わるイベント、当方主催のパンダタオル手作り教室等でパンダ作りを行っています。

11月6日～11日には、中国四川省への被災地視察調査に参加し、皆さんの心のこもった「パンダタオル」を現地へお届けするチャンスを頂きました。しかし、11月に行った第2回現地報告会では参加者約40名であり、既に「被災地の風化」が大きな課題となっていると感じました。

そんな中、震災当初から瓦礫の撤去を行い、現在は地域全体の復興支援を継続しているCODE海外災害援助市民センター吉椿雅道さんは、活動中に出会った住民の方が「私たちに関心をもってくれてありがとう」と何度もお礼を言われたことが印象的であったと報告しています。

今年の7月11日～14日、2度目の訪問が実現し、約400個のパンダタオルを手渡すことができました。そして、第3回現地訪問として、10月24日～27日に、8名がさらに約450個のパンダタオル、熊猫通信、株式会社ラッシュジャパンのソープ190個を届けました。今回の報告会では、第3回の現地訪問の報告、そして来年3月に予定している現地の方と日本のボランティアとの交流企画「減災ワークショップ」の実施につなげていきたいと考えます。

長期に渡る被災地復興を支えているのは、日本での災害の時と同じように『相手の心に寄り添う気持ち』であると改めて感じます。これまで多くの方々がパンダタオルを通じて繋がり、被災地へ思いを馳せ、また自分の住む地域の防災対策についても感心を寄せ始めました。被災地からの学びや関わる方々の想いを四川の皆さんに必ず届けることを目標にし、「パンダタオル」をきっかけに、国際協力・被災地の復興支援、活動を通じたネットワークづくりについて、参加者のみなさんと考えていきたいと思えます。

【代表理事栗田より】



「栗田代表による挨拶」

今回で、報告会も5回目を迎えます。参加人数は会を重ねることに、減少しています。被災した地域は、1～2年で復興はできません。地道に長く続けていける支援を目指していきたいと思います。9月に静岡県駿東郡清水町立南中学校でパンダタオル手づくり教室を行いました。小さなかけ橋が大きく実を結ぶことを考えると、このような地道な活動は非常に大切だと思います。また、株式会社ラッシュジャパンからの助成やソープの提供、CODE海外災害援助市民センターの吉椿雅道さんの現地でのコーディネートにより、今回の訪問が実現したことに心から感謝しています。訪問したメンバーは、現地の方と強い絆を結ぶことができました。3月に予定している交流会では、中国四川大地震から学び、今後の中国と日本の知恵の交換につなげていきたいと思っています。

【あれから1年半 四川省は今/CODE 吉椿さん】

「中国四川大地震の概要」

四川省は日本から約2000キロです。当時はミャンマーのサイクロン（20万人死亡）に、海外のNGOが支援に入っていました。中国も最初は国内で何とかしようと考えて

いましたが、被災規模が分かってくると、海外の救援隊を受け入れました。四川省は、8700万人・面積は日本の約1.3倍です。成都の人口は1000万人。茶坪山（チャールピンシャン）の活断層（300キロ）が一気に動いて甚大な被害をもたらしました。阪神淡路大震災の20倍～30倍規模の地震です。未だ1万8000人が行方不明で、多くの子どもたちが亡くなりました。北川県は、避暑地で、観光地となっています。3万人の人口で、震災で2万人近くが亡くなりました。未だ5000人が見つかっていません。1か月後、震災でできたダムが決壊し、被害が拡大しました。9月の水害でも大量の土石流の被害にあっています。

「避難所・仮設住宅について」

災害直後は、おもに北川県の人が避難所で生活をしていました。農村部は、田植えの時期で、家を離れられないという理由もあり、掘立小屋や吹きさらしの建物を避難所にしました。都江堰は、政府のテントが配られ、テント村ができました。仮設住宅には、共同の炊事場と水場があり、被災者同士が顔を合わせ、出会う場所になります。今は、売店、タバコ屋、床屋、レンタルDVD屋ができています。

「住宅再建について」

昨年秋から住宅再建が始まっています。農村部は、耐震構造がしっかりしていません。鉄筋も入っていないため、次の地震でも倒壊すると考えられます。しかし、光明村は、震災時倒壊せずに残っていた木造建築の方法で再建が行われました。ひとつの作業を一緒にできる木造住宅の再建は、被災格差でぎくしゃくする被災者にとって、絆が強まることにもなりました。また、チャン族

の伝統様式の建物の中には、鉄筋を入れて耐震補強されたものもありました。

「地震が起きてから1年半の光明村について」

昨年9月から再建が始まりました。今は住宅再建がほぼ終わり、ホットしているところです。しかし、1年半経ってもお金がなく、1階しか完成していないところもあります。2回目の冬を迎えますが、吹き抜けの家もあり、寒さが心配です。また、中国四川大地震以降、建築資材の高騰により、1件4~5万円でできた再建が、10万円前後となりました。そのため、再建が難しくなりました。また、中国の復興計画の中に、新農村建設、西部大開発が盛り込まれています。その計画の中で、道路建設も行われています。そして、CODEプロジェクトのコミュニティーセンター、診療所の再建、学校建設など、インフラの整備が進んでいます。

「CODE海外援助市民センターの活動」

昨年、5月12日直後から、光明村へ入りました。最初は瓦礫の撤去をひたすら行い、被災者の方と信頼関係を作っていました。光明村では毎年朝陽の節句(旧暦9月9日)にお祭りを実施します。しかし、昨年は地震の影響で、村自体にお金もなく、祭りをすることはできませんでした。村に高齢者中心の老年活動クラブがあり、村の意向により、今年の3月に友好の祭りを行いました。そして、今回10月26日にも実現しました。海外を支援する際に考えることは、被災者の自立支援です。そして一番大切なことはきっかけづくりです。私たちはあくまでもきっかけを作るという立場で、どうしたら村の人たちが、そこにあるもので、

元気になっていくのかを考えていく必要があります。

「祭りについて」

祭りをやることについて、村の幹部の方から待たがかかりました。震災により村にお金がないという理由もあり、躊躇していました。しかし、「日本の人も皆さんに関心を持っているし、やろうよ!」と背中を押すことにより、開催が決定しました。開催決定の翌日から練習が始まります。毎日芝居や、踊りの練習をしました。村の人たちがどんどん元気になっていきました。村の人たちにとって、祭りはとても大切なものなのです。祭りの前日には、村にホームステイをしたのですが、村の人は、快く受け入れてくれました。当日は雨がひどく降りましたが、祭りに対する思いなどもあり、誰一人として中止にしようという人はいませんでした。みんなで泥だらけになりながら、みんなでテントを作ったりし、村の人たちにとってもとても印象に残る祭りになりました。

「被災地の現状」

「北川县城」

地震発災から1年半が経過しました。まだ5000人以上の人が眠ったままで、ご家族がお参りに来ます。今年の7月、8月にも土砂災害などがあり、修復が難しいということで、新しい北川県の町を20キロほど離れたところに作っています。山東省による大規模な建設です。北川县城は、観光地にもなっています。今は道路建設なども行われ、お店の移転、立ち退きの動きもあります。新しい北川县城では、農民は、300~400平米持っていた土地を国に回収されます。農民にとって、農地は大切です。

新しい住居は割り当てられますが、農業ができなくなります。そこに暮らす人たちの、アイデンティティーをどのように保護、維持していくかが課題です。

「映秀鎮」

ブン川県映秀鎮にも、まだ 2000 人のご遺体が埋まっています。地震遺跡、共同墓地、モニュメントができています。被災地の観光地は中国の特徴と言えますが、そうやって暮らすしかないという理由もあります。ここに、大規模な仮設住宅がありました。1 年で撤去されました。

「ブン川県」

ここは震災をきっかけとして、100 年前の清代を取り戻そうと、伝統の木造住宅や古い街並みの再建が行われています。

「チャン族の村」

昨年 12 月は、寒さのあまりセメントが固まらず、再建をストップしていました。対口支援で広東省が支援していますが、建設された家屋の壁には、ヒビが入っていたり、鉄筋から錆がでています。そこから雨が漏れている状態で、入居している人はほとんどいません。中国は、国土が広く文化も多様なため、温かい地域の広東省が、この山岳地帯の再建を行うのは、環境に違いがありすぎるのではないかと思います。

「綿竹市漢汪」

3 月ころまでは観光地になっていましたが、危ないということもあり、4 月から封鎖されています。



「四川省の現状を伝える吉椿さん」

「1 年半経過しての課題」

- ・復興格差
- ・住宅再建後の生業
- ・もともとある社会問題（三農問題、僻地医療）
- ・長期化する復興事業
- ・1 年後からの劇人畜債権による暮らしの変化
- ・集団移転後のアイデンティティー

復興格差は進んでいます。対口支援から漏れたところもあります。NGOが漏れたところを支援すべきですが、被災地が広すぎるとい理由もあり、全体の状況把握ができていません。国、被災地、外部団体との連携がうまく取れていないという現状もあります。また金融危機以降、出稼ぎに行けなくなっていました。最近はお出稼ぎへ行っても、仕事が見つからない状況です。農業、農民、農村の貧困問題も表にでてきました。JICAが心のケアをしています。長期化するなかで、幹部の自殺も問題もあります。また、仮設住宅から出ていくことになり、生活の立て直し、集団移転後のアイデンティティーの問題も今後出てくると思います。

【中国四川大地震応援団／第三次パンダタオル班】

- ・ 団長：関口威人さん
- ・ 伊藤誠也さん、村瀬晴香さん、浦野理恵さん（愛知大学生 3 名）、椿佳代さん、清水紀子さん（中国東方航空社員）、鈴木ひさ子さん、後藤茂元さん（JAL カーゴサービス）の 8 名

訪問日程：10月24日（土）～27日（火）

訪問：四川省綿陽市北川県香泉郷光明村

内容：光明村のお祭りに参加、メンバーは浴衣を着て、炭坑節を披露

「パンダタオル約 450 個、熊猫通信 450 通、ラッシュジャパンのソープ 190 個をお届け」

訪問の目的：

- ・ 復興の現状把握／3 月の交流会に向けての顔つなぎと関係づくり／3 月の交流会を兼ねての視察



「中国四川省訪問メンバー」

「北川県の訪問」

- ・ メンバー全員で、慰霊碑を前にお参りをしました。5 階建てのビルがまだ埋まっていた。2008 年 5 月 12 日からそのままの状態になっています。また、仮設住宅は空き家が多くなってきています。

「ホームステイ」

- ・ 組長さんの家に泊まりました。夕食をふ

るまってくださいました。村の方はお酒をたくさん飲まれるので、机の下にポリタンクに入ったお酒が置いてあり、一緒に飲みました。

- ・ ホームステイ先では、釜戸を使って調理された料理がふるまわれました。食事後は、使用した鍋に湯を入れて油を取り、そのお湯で食器を洗います。そのお湯は、家で飼っている豚に与えていました。そして、使用した紙コップは薪に使用しているところを見て、リサイクルがしっかりされていることを感じました。また、家々には、メタンガスのタンクがあり、家畜の肥料を発酵させ、ガスを貯め使用しています。

「ラッシュジャパンのソープについて」

- ・ 前日に、光明村でソープを袋に入れる作業を光明村で行ったのですが、子どもたちが集まってきて、興味をもち、一緒に手伝ってくれました。甘い匂いがするため、口に入れそうになったりしました。お祭りでソープを配るときには、子どもたちがたくさん集まってきてくれました。



「ソープに興味を見せる子どもたち」

「お祭り当日」

- 朝から雨が降りましたが、とても印象に残るお祭りになりました。メンバーは、炭坑節を披露しました。自分たちが踊っている

中で、村の方々が寄ってきてくださり、一緒に炭坑節を踊ることができました。メンバーが浴衣を着ているとき興味を持った様子で、子どもたちがたくさん集まってきてくれました。村の人や子どもたちは、今まで練習を重ねてきた踊りや演劇を披露してくれました。今回のお祭りでは、村の人たちの「助け合いの心」を感じる機会にもなりました。雨が降っている中、私たちに後ろから傘をそっと差しのべてくださったり、テントを建てる時など、それぞれに役割分担があり、みんなが自然と協力していました。また子どもたちが披露してくれた「感謝の心」という歌には、「つらい時にあなたがいてくれてありがとう。」という歌詞があり、心をうたれました。最後に日本人みんなで「世界にひとつだけの花」を合唱しました。



「浴衣を着て、炭坑節を踊りました」

「参加者の感想」

・言葉の壁が大きいと感じましたが、メンバーの中で中国語が話せる方もいたので、役割分担ができていたと思います。また、私たちが今回訪問できたのは、吉椿さんが現地で信頼関係を結んでいてくれたからこそだと思います。

・北川県の前の慰霊碑の前に立ったときの光景は、忘れられません。当日のことを、

涙ながらにお話をしてくださった方もいました。

・子どもたちが「おねえちゃん」と言ってくれたこと、子どもたちと触れあうことができ、笑顔が見れたことが一番印象に残っています。

・別れるとき、滞在期間が短い私たちに「お前たちは今度いつ帰ってくるんだ？」と言ってくれことがすごくうれしかったです。



「光明村の笑顔に出会えた訪問でした」

「代表理事栗田より」

・パンダタオールプロジェクトが立ち上がり、パンダタオールをつくり、被災地の皆さんの手に渡るまでに、多くの時間を要しました。しかし、1年半経った今、名古屋から8名が訪問し、村の方々との交流ができたことは、これまでの地道な活動の成果であると大変うれしく思います。パンダがかけ橋となって笑顔を届け、明日から頑張ろうと思う気持ちを村人に持ってもらうことができればということが願いでした。阪神・淡路大震災では、「また来るね」と言いながら帰っていったボランティアが、結局来なかったという被災者の言葉を聞きました。このような出会いの場の積み重ねにより、心の通いあえる関係になっていくことが必要だと思います。この気持ちを忘れずに、今後も活動していきます。

「質疑応答」

・子どもの様子：村に残っているのは小学生までです。村に中学校がないので中学校卒業後に寮に入ります。教育熱が高まっており、無理にでも親は学校に行かせようとします。しかし、中学校に入っていない人は、村で何もせずにいる人もいるという現状もあります。

・貧困の格差：自分たちで食べるものはあります。光明村は、最貧困層ではありません。農業収入は2000～3000元です。成都の大卒の1か月の給料分ぐらいです。農業として成り立たないため、出稼ぎに出なければなりません。

・瓦礫に埋まっている人たちの今後：4～5か所は地震博物館として残す予定です。そのまま長期的に残すというのは技術的に不可能です。いずれ縮小する場合は、撤去の時に掘り出したり、ということはあるかもしれません。

・金銭的な問題解決：農村部では現金収入はありません。みなさん笑顔で笑っていますが、これから多額の借金を返していかなければなりません。政府の補助は平均2万元、残りの8万元は自分たちで何とかしないといけない状況です。最大5万元は銀行から借りられますが、3年間のみ無利子です。

・震災当時の配給について：震災直後3か月間はありました。1日10元、月300元（一人あたり）罹災証明書をもった人だけです。500グラムの米を毎日配りました。3か月後は食糧に関する配給はほとんどありませんでした。しかし、沢山配給されたため、まだ余っている状態です。中国で餓死者が出るということはほとんどありません。自分たちで食べるものは自分たちで作るのが主流です。

・今後私たちができること：金銭的な支援は膨大すぎて難しいと思います。中国の農村部をどうやって発展させていくのか？というもともと中国にある問題があります。農村部に特産品を作るとか、コミュニティビジネスのような方法で農村が出稼ぎに行かなくてもその場で生活が成り立つような支援ができないかと考えています。



「質疑応答の様子」

「参加者の感想」

・RSYの活動については、中国で知っていました。いち中国人として、とても感謝しています。日本人の方がここまでやっていることに感謝します。

・ただ、かわいそうだからものをあげるだけではなく、文化の交流ができたことがよかったと思います。また、双方の交流が重要だと思いました。

・復興や災害支援というと、一方通行の支援というイメージが強いのですが、そうではなく、お互いに学び合うという関係が大切だと思いました。

・今後、中国から学んだことを日本の方に伝えるということがとても重要だと思います。

・パンダタオルプロジェクトのような活動を次の災害でもつなげてほしいです。